

入賞作品

私の旅の続き

赤倉 聖来

「よし！一人旅に出よう！」

そう思ったのは、小学生のときだ。その時、私は何を思ったのか「一人でどこかに行ってみよう」そう思ったのだ。読者の皆さん、心配はしないでほしい。決して家出ではない。ただ単に一人、内陸線に乗ってどこかに行ってみたかったのだ。あのときは、「内陸線が好き」と純粋に思っていた。しかし、当日は親と二人で行くことになった。一日乗り放題のきっぷを片手に持ち、ワクワクの気持ちを隠せないまま鷹巣まで行き、ご飯は手作りお弁当を食べたり、温泉に入ったりして素敵な時間を送った。そして、また行きたいとずっと思っていた。密かに一人で次は乗ろうと考えていた。

それから六年が経ち高校三年生の今、好きな内陸線に乗って家に帰る。前までは趣味の一つとして乗っていた内陸線に、今は通学するために乗っている。なんかとても不思議な気持ちだった。毎日のようにガタンゴットンと揺れて家に帰る。高校一年生のときはあのようにワクワクが止まらなかつた。ただ、正直に言ってしまうと何もなくならない「The田舎」という場所に飽きていたというのも事実だ。内陸線は嫌いでは

ない。毎日のように優しく声をかけてくれる駅員さんがいる。だが、これからもずっと内陸線に乗りたいという気持ちはだんだんと薄れていった。しかし、内陸線に乗るのもあと半年だと思っていたとき私に大きな転機が訪れる。

九月一七日、私は部活動の研修で阿仁合に行くことになった。片手にワンデーパスを持ち、内陸線を待っていた姿は数年前のあのときと同じだ。八津駅からは私しか乗らない。こんなちっぽけなことでも田舎だなと感じてしまう。また、ここでもなんとも言えない不思議な気持ちになった。乗ってすぐに、違和感を持った。なにか変だ。いつもと違う。ただ、すぐに分かった。その違和感とは、もう人が座れないほどのお客さんが乗っていたことだ。学校帰りは六時を過ぎるため、数人しか乗れない風景に見慣れてしまっていたのだ。そんな驚きを誰にも悟られないように座りながら、十時十一分の出発の時を待つ。

阿仁合まで約一時間半は、長い。結構長い。いつも十五分乗っていれば家に着く私にとって、一時間半は長い。そう思っていた。しかし、あつという間だった。学校の先生と話し、田んぼアートを見る。そして比立内橋梁を通過し紅葉の時期はもっと綺麗なんだろうと思っていると「次は、阿仁合です」とアナウンスが入る。阿仁合に到着し、ワンデーパスを駅員さんに見せる。そこには、いつも角館駅で声をかけてくれるアテンダントさんがいた。なんかホッとした。それと同時にワクワク感が増した。数年前のあの時と同じだ。少し、小さい頃に戻れたような気がして嬉しさが残る。

お昼ご飯はこぐま亭で親子丼を食べた。とっても美味しかった。

た。何が美味しかったの？と聞かれても私は答えない。絶対に答えない。なぜなら、これを読んだ人は親子丼の味が想像で分かってしまい、もうそこで料理を食べていないのに完成してしまうからだ。ぜひ、これは直接こぐま亭に足を運んで食べてもらいたい一品である。そう言われると、ワクワクが止まらなくなるのだろうか。ぜひそのワクワクしている気持ちのまま、残りの私の話を読んでほしい。

一時間半のフリータイムは何をして過ごそうか。そう無計画のまま歩き出し、角館高校の裏坂よりも急な坂を上り、すぐに下る。映画のワンシーンにもありそうな光景に心が踊った。まだ稲刈りが始まっていない黄金の絨毯が敷かれたあの光景にも心が奪われる。今思えば、黄金の絨毯に絵がついた田んぼアートをじっくりと見たのも数年ぶりである。これはここでしか見られない。内陸線に乗った者の特権である。笑内のチーズ饅頭をお土産に買い、帰りの内陸線に乗る。帰り際に菓を貰った。そこには大きく「ありがとう」と書かれていた。私は前に角館駅でも貰っている。そこには「よい学校生活応援しています」と温かいメッセージが書かれているのを思い出した。これは、都会でもよくある事なのだろうか。いや、内陸線に乗らなければ、触れ合うことのできない内陸線ならではの優しさだ。

「次は八津です」このアナウンスが流れるまであつという間だった。聞き慣れた声といつも笑顔で見送ってくれるアテンダントさん。そして、あのワクワクはただこの旅が楽しいからだけではない。内陸線に乗らなければ、見られない景色がある。会えない人がいる。「内陸線が好きだ」そう改めて思ったからだ。

見たい景色がある、会いたいひとがいる秋田内陸線に、明日も明後日も数年後も乗りに行こうと思う。スマイルレールはずっと誰かの心に残り続ける。これからあるかもしれない。ガツタンゴットンと揺れながら始まる一人旅が。